

認知症になっても 安心して暮らせるまちに

学生が中心となった 認知症カフェがオープン!

9月24日、柏原市に認知症の方と家族のつどいの場として、「カフェほのぼの」がオープンしました。

地域の高齢者にいきいきと元気に過ごしていただくため、民家を利用して週2回運営している「ふれあいの家ほのぼの」を活用し、認知症の方やその家族、地域住民、専門職が情報共有し合い、顔なじみの関係となり、家族介護者にとって気軽に情報交換や相談ができる場となることを目指して、月1回ペースでの開催が決まっています。

カフェほのぼのの大きな特徴は、①お茶を楽しみながらのリラックスタイム②地元の大学生

認知症の方を地域で支えていくために、地域の中にカフェをつくりたいと考えていた柏原市社協に、地元の関西福祉科学大学から、「学生とともにバリエーションを活かした認知症カフェを協働でしませんか?」との提案があり、社協・大学・地区福祉委員会・認知症家族介護者の会・社会福祉施設・民生委員や行政等が約半年間にわたる協議を重ね、実現に至りました。



全員で手をつなぎ懐かしい歌を歌う。歌は、グループの一体感を高める効果がある。

当日は、関西福祉科学大学の都村尚子教授と学生によるグループバリエーションの実演があり、コミュニケーションを促すリーダー役と、当事者役の参加メンバーそれぞれには「挨拶をする役」「お菓子を配る役」「歌のかけ声をかける役」などの役割が設けられました。相手の心に寄り添うコミュニケーションと共感、交流をベースに、自分にも大事な「役割」があること

連載 Vol.4

つながりで拓く地域福祉実践

～発達に不安がある子どもと親のためのひろば開催：泉南市～

「乳幼児の発達に少し不安のある保護者が少しでもほっとできれば…」そんな思いでスタートした泉南市一丘地区福祉委員会のどんぐりひろばを紹介します。

親子がいるという
こともあり、社協に相談。
子どもの発達の専門的
な関心である子ども総
合支援センターに協力を依頼し、2年前から実施することになりました。



当日は5組の親子が参加。会場いっぱい遊びます。

「子どもたちは本当にかわいいです。このひろばを卒業し、幼稚園に入園した子が、集団生活で頑張っている姿をみて、本当に感動しました」と話す地区福祉委員の皆さん。回を重ねるごとに自然に遊ぶようになるようになり、子どもたちの日々の成長が本当にうれしいとのことでした。

「身近な地域でサロンができ、子どもたちは元気に入ってきます。慣れた場所とスタッフに安心してすぐに遊びはじめる子どもたち。」
「ここは、一丘地区福祉委員会が開催する「どんぐりひろば」で、成長に少し不安がある乳幼児と保護者を対象に、月1回、第4水曜日の10時～11時半に実施しています。」
「専門的な知識がなく、最初は不安でした」と語るのは、委員長の西本さん。一丘地区では、他の曜日に子育てサロンも開催していますが、集団になじめず、他の子とトラブルになってしまうなどの理由で、気兼ねして参加しづらい

「身近な地域でサロンができ、子どもたちは元気に入ってきます。慣れた場所とスタッフに安心して遊ぶ場であり、お母さんたちがくつろぎ、気軽に相談できる場所です。」
参加したお母さんからは、「近くにはひろばがあつて助かる。ここで刺激をもらってゆっくり発達していくくれたら」という声がかたが、最初は表情が暗かったお母さんも参加するうちに明るくなってきました。「子どもたちは本当にかわいいです。このひろばを卒業し、幼稚園に入園した子が、集団生活で頑張っている姿をみて、本当に感動しました」と話す地区福祉委員の皆さん。回を重ねるごとに自然に遊ぶようになるようになり、子どもたちの日々の成長が本当にうれしいとのことでした。



おそろいのエプロンが地区福祉委員。保育士と連携して活動しています。

によるバリデーション実践(※) 認知症の方へのコミュニケーション方法の1つで、自尊心を回復し、ひきこもりを予防する(③)認知症に関するさまざまな情報の発信拠点の3つがあげられます。

今回の企画のはじまりは大学から社協への声かけ。今年4月、



つながる ひろがる 地域福祉を支える「ひと」

このコーナーでは、地域福祉の実践を支える「ひと」に話を伺い、「地域での出会い(きっかけ)」や「活動のひろがり」を紹介しします。

今回は、「カフェほのぼの」に関わるお二人をご紹介します。

◎今回の企画を提案するに至った想いをおきかせください。

A 認知症のご本人や家族を支える場はまさに「地域」であり、

を実感してもらおうことで、グループの中に居場所を確保し、社会的役割を回復するとともに、自然と仲間意識が芽生えてくるなどの効果が得られると、実践や経験談をもとにした話がありました。

10月7日(水)には、早速2回目のカフェが開かれ、当事者やその友人、家族、地区福祉委員や民生委員の方が参加。学生を中心にグループバリデーションの実践が行われるなど、今後のつどいの場の活性化に大きな期待が寄せられています。



関西福祉科学大学 社会福祉学部 社会福祉学科 都村 尚子 教授

1人の認知症当事者の在宅生活を支えていくうえで、本人やご家族との関わりにバリデーションの力を活かせるのではと思っていました。また、学生にとっても実習ではなく「実践」の場として、地域の方々と関われることが大きな経験になるとの思いから提案に至りました。

実際、地区福祉委員会の方々が運営するサロンの場で、その姿や想いに触れる中で、

同じ地域福祉の担い手としての自覚や主体性が一層高まったように感じています。

◎企画を実現するうえでのポイントと、これからに向けた想いをお願いします。

A 実習生の受け入れをはじめ、社協さんとの日々のつながりがあったからこそ、実現できたと思っています。地区福祉委員会・認知症家族介護者の会・民生委員等、同じ地域に住む多様な方々とのつながりを大切に、これからも想いを共有しながら、このカフェを継続・発展させていきたいです。



関西福祉科学大学 社会福祉学部 社会福祉学科 4回生 仲野 絢さん

◎仲野さんは今回のプロジェクトの学生リーダーということですが、関わったきっかけを教えてください。

A 3回生で実習に行った特養では、認知症高齢者の方とうまくコミュニケーションが図れず、自分の知識や経験の少なさを感じました。その後バリデーションを学び、地元の福祉施設で実践を重ねる中で、失語症の方が自分から懸命に

藤井寺市

社会福祉施設連絡会を設立!

藤井寺市社協では、9月29日に「藤井寺市社会福祉施設連絡会(地域貢献連絡会)」の設立総会が開かれました。本連絡会は市内の社会福祉法人 施設が構成メンバーとなり、市社協が事務局を担います。

この総会で、(福)みささぎ会の奥田益弘理事長が連絡会会長に選任され、続いて採択された27年度事業計画では「市内の社会福祉法人 社会福祉施設は、その有する機能を活かし、これまで培ってきたノウハウ等を広く発信するとともに、当連絡会を通じて連携を強化し社会福祉法人の原点に立ち返り、社会福祉法人のミッションとして各種事業を推進していく」ことが確認されました。

これで府内では27社協が取り組むまでに広がってきた地域貢献委員会(施設連絡会)。今年度内にはさらに複数の設置予定があり、府社協では、府域全体での連絡会議を呼びかけ、一層の設置促進、活性化を進め、地域福祉の充実に努めていきます。

表現をされたり、微笑んでくれるようになった経験もあって、この企画を知ったとき、認知症の方との関わりで学んだことを活かしたい!と強く思い、参加しました。

◎同じプロジェクトメンバーもさまざまな想いで参加されているんですね?

A 現在、この企画には30人弱の学生が関わっています。同じように実習や実践の中で当事者との心の距離を縮めることができた経験から、将来、福祉の仕事で活かしたい!という熱い想いを持ったメンバーがたくさんいます。入学前にテレビで都村先生のバリデーションの特集を見て、「ぜひ自分も学びたい」と参加した



カフェほのぼのを支えるバリデーションプロジェクトのメンバーと社協職員、ふれあいの家ほのぼのの管理運営委員会会長。

1回生もいます。

◎これからの抱負を聞かせてください

A より多くの当事者の方、ご家族の方に安心して参加していただきたいです。ご家族には自分たちの経験も交えて、バリデーションの効果をお伝えしながら、広くこの地域に住む方々に呼びかけ、広がってほしいと思います。